

報 告

第 43 回日本リハビリテーション工学協会 車いす SIG 講習会 in 大東

北井 亜弥

1. はじめに

私はシャルコー・マリー・トゥース病という原因不明の難病である。2000 年頃より手足に麻痺がはじめ、症状は緩やかに進行している。杖・下肢装具の使用を経て、2015 年に車いすを購入。それぞれを使い分けて生活をしており、現在は一般企業に勤務している。今回の報告では、車いす使用者としての視点から感想を述べたい。

2. 講習会への参加

2016 年 1 月 23 日(土)～24 日(日)の 2 日間。場所は、川村義肢株式会社(大阪府大東市御領)で開催された。参加者 34 名のうち、車いす使用者は私を含め 2 名。医療従事者・福祉関係・メーカーの方がほとんどであった。今回は座学中心で基礎的な内容であったが、「車いすは椅子に直接車輪が付いているというユニークな乗り物である」という話は興味深かった。昼休みにはメーカーのプレゼンや展示があり、営業活動の印象を色濃く感じた。使用者として業界の裏側を見たように思う。

3. 車いすで何をするのか

講師の方々が共通して「車いすに乗ることが目的ではなく、乗って何をすることが重要」と話されていて、とても共感した。車いすはあくまで手段である。しかし、本当の意味でそれを理解している作り手は少ないように思う。「この人の身体状態でなぜそのセッティングなのか?」と素人の私でも思うような車いすが多くあるからだ。乗ることを目的としたものが多く、身体的な面でカバーされていても、したいことができないという声もよく聞く。そういう場合の多くは、安

全面の考慮に偏った作り手主導のセッティングであり、「こうする人が多い」と勧められるままに作ったなど、当事者が車いすのことをよく知らないために起こってしまうのである。

4. 考える「サポート」の違い

当事者と介助者の考えるサポートには、違いが生じることがある。介助者が当事者に対して必要なサポートを考える機会はあるとしても、その逆は少ない。当事者はされる側、介助者はする側と捉えることが多いが、サポートを考える上でそのベクトルは一方通行でなく、両方向であるべきだ。当事者がより能動的に関わるために、介助者の立場を当事者が考える機会が必要である。先に述べた、作り手主導の車いすもその違いからきているのだと思う。車いすを作る前に何をサポートしてほしいのか、十分に摺合せをしておかなければならない。作り手が車いすの難しい理論をどれだけ知っていても、その目的がずれていけば無駄になってしまう。ただ、現実には実際に生活をして初めてわかることも多く、事前にじっくりと試す機会などが無ければ解決は難しいといえる。しかし、そのギャップを最小限にすることで、当事者がより理想に近い車いすに出会える。

5. 最後に

体の一部である車いすにあまり関心のない当事者もいる。可能であれば、自動車免許を取得するように、当事者こそこのような講習会に参加すべきだと思う。初心者には考えるきっかけになり、乗りこなしている人でも理論的に頭で整理することができ、周りにも伝えることができるようになる。今回の講習会で車いすが今まで以上に好きになった。このような会に参加させていただいたことに感謝するとともに、当事者の参加が増えることを願う。

奈良県在住